

(ロ) その他

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
(ト)	浮子方目通し	ポリ	50本	1	1目殺, 4目遊を41セット, 1目殺, 9目遊を40セット
(チ)	沈子方目通し	スパンナイロン	23本	1	1目通し
(リ)	浮子	合成樹脂	DONAN MC-5	21	浮子下4目遊び
(ヌ)	浮標	発泡スチロール		2	1連分。 反どうしのつなぎ目は、浮子網の先を沈子網端の輪に通し、浮子網どうしをつないでいく。 手網は1連の両端のところのみ付ける。
(ル)	浮標綱	パイレン	550本 100m	2	
(ロ)	錨	鉄	7~8kg	2	
(ワ)	錨綱	パイレン	550本 1.5m	2	
(カ)	手綱	パイレン	550本 10m	2	

2) 漁法

1連80~100反を2連使用して操業する。

まず潮流に沿って投網しておき、翌朝揚網し、漁獲物を外したのち直ちに投網する。操業は午前10~11時には帰港できる程度に終了する。

3) 使用漁船および乗組員

2~4.9トン, 2~3人乗組み。

4) 漁期・漁場

漁期は周年だが、シタビラメ類(クツゾコ)が主体となるのは11月~翌年3月までで、盛漁期は11~12月である。

漁場は主に水深40~60mの砂泥地であるが、水深が5mほどのところでも操業することがある。昔は岸から徒歩で網を入れることもあった。

5) 漁獲物

シタビラメ類, コチ(6~8月), オコゼ類, メイタガレイなど。

(2) 浮刺網類

32 キビナゴ刺網(五島編)

調査地 若松町若松

1) 漁具

(1) 見取図および網地展開図

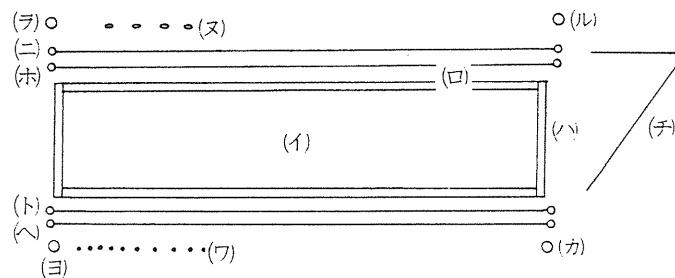
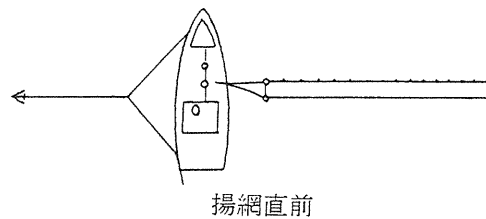
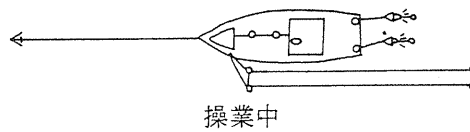


図32 操業見取図および一般構成

(2) 漁具仕様

表32 仕様表

(イ) 網類

符号	名称	材質	太さ	目合	掛目	長さ	仕立上り長	備 考
(イ)	身 網	ナイロン	3本	21節	600目	18.75m	15m	横目使用
(ロ)	縁 網	〃	18本	6節	5目	〃	15×2m	浮子, 沈子方に使用。添網とかけあわせる。
(ハ)	縁 網	〃	〃	〃	〃	5.5m	5.5×2m	脇用, 筋網は使用しない

(ロ) 網類

符号	名 称	材 質	太さ	長さ	本数	備 考
(ニ)	浮子網	クレポリ	6mm	15m	1本	浮子網と添網は反対撚りを使用する。 両端にツボを作る。
(ホ)	浮子添網	〃	〃	〃	〃	
(ヘ)	沈子網	〃	〃	〃	〃	
(ト)	沈子添網	〃	〃	〃	〃	
(チ)	股 網	クレモナ	12mm	6m	〃	浮子方2m, 沈子方4m
(リ)	錨 網	〃			〃	水深の3倍

(ハ) その他

符号	名 称	材 質	規格・寸法	本数	備 考	
(ス)	浮 子	合成樹脂	プロパーA C-5	58個	浮力50g	
(ル)	〃	〃		30cm径	1個	網の端につける(船側)
(エ)	〃	〃		20cm径	〃	〃(沖側)
(フ)	沈 子	鉛		26.3g	90個	
(ケ)	〃	自然石		8~10kg	1個	網の端につける(船側)
(コ)	〃	〃		4kg	〃	〃(沖側)
(ク)	〃	鉛		3kg	2個	水中灯の下につける。
(セ)	水 中 灯			1.5kW	〃	
(ソ)	船 上 灯			1kW	〃	
(ツ)	錨	鋼		45kg	1個	

2) 漁 法

午前2~3時頃出港, 地先漁場に向う。漁場に着くと魚探で反応を見て, 船上灯を点灯するとともに船尾部の両舷から水中灯を, 月夜は反応の上に, 闇夜は反応の下に入れ, 魚群の反応が動かなければアンカーを入れる。集魚を続け反応が上層まで薄く出てきたら, 網を船首部甲板から入れる。魚の浮き具合を見て水中灯を除々に上げ, 30分位で魚を浮かせ, その後10~30分で揚網する。揚網は潮が早くない時はそのままの状態ですら船首部甲板から2人が船首部側に浮子方を, 船尾部側に沈子方を持ち, 網を振ってキビナゴをはずしながら揚げる。キビナゴは直ちに水氷にする。潮が早い時はアンカー網を連べし船首部と船尾部に股網をとり, 船を潮に直角に向けて2人で揚網する。反応が続けば揚げながら別の網を再び入れ操業を繰り返す。1日2~3回多い時4回操業する。

3) 使用漁船および乗組員

使用漁船は4~5トン, 20~60馬力で乗組員は2人である。船上灯1kW2灯, 水中灯1.5kW2灯を使用する。

4) 漁期・漁場

漁期は12~2月, 盛期12月下旬~1月下旬。漁場は地先の共同漁業権内の水深15~40mの所で, 潮どまりの時は全般的に操業出来るが潮が動きだすと入江に入る。

5) 漁獲物

漁獲物はキビナゴで1網平均4~5箱, 最高15箱, 1日平均12~13箱, 最高50箱である。

- ・この漁法は昭和49~50年(1974~1975年)から水中灯を使用するようになった。それ以前は魚群の中に網をおろし, 威嚇して漁獲していた。
- ・アンカー掛りしないで船を網に直角に立てるように前後進して操業することもあるが, 漁獲はアンカー掛りの方が良い。
- ・現在の網地は3本ものを使用しているがキビナゴの首が切れやすい。4~6本ものの方が良いかもしれない。
- ・夜中までにとったら翌朝, 腹が赤くなり割れやすい。

・魚体の大きさに合わせ数種類の目合の網を用意している。

※この漁具・漁法は昭和58年（1983年）当時のものであり、平成14年（2002年）現在、漁具の浮子綱長10m以内、網高さ8m以内、集魚灯光力計3kW以下で操業されている。

33 キビナゴ刺網〈五島編〉

調査地 玉之浦町大宝

沿革 戦前（昭和16年（1941年）以前）より行われているが、昭和48年（1973年）頃より昭和58年（1983年）当時のような電気たきこみ漁が始まった。

1) 漁 具

(1) 見取図

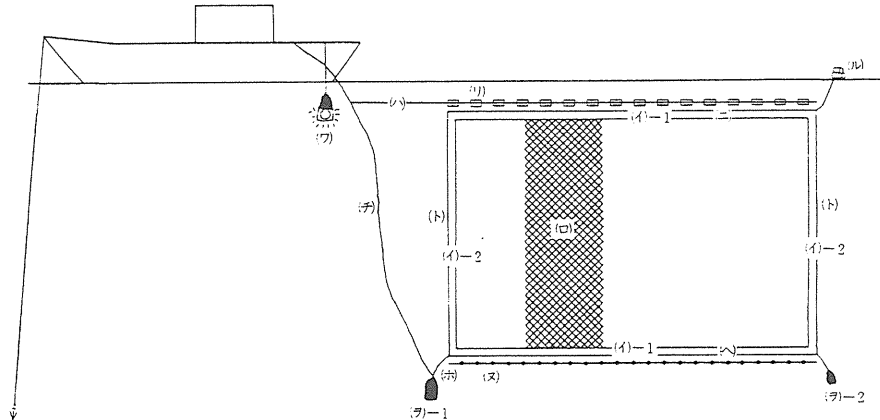


図33 漁具見取図

(2) 漁具仕様

表33 仕様表

(イ) 網、網類

符号	名 称	材 質	太さ又は重さ	目合	掛目	長さ	仕立上長	反数	備 考
(イ)-1	縁 網	ナイロン	15本	7.5cm	5	27.7m	14.2m	2反	
(イ)-2	〃	〃	〃	〃	5	13.5m	9m	〃	
(ロ)	身 網	〃	2子4本	1.5cm	800	18.7m	14.2m	1反	
(リ)	浮子綱	クレポリ	5mm			14.2m	〃		
(ニ)	浮子添綱	〃	3mm			〃	〃		
(ホ)	沈子綱	〃	5mm			〃	〃		
(ヘ)	沈子添綱	〃	3mm			〃	〃		
(ト)	筋ロープ	〃	〃			9m	9m		左右2本使用

(ロ) その他

符号	名 称	材 料	規格・寸法	個数又は長さ	備 考
(ケ)	オモリロープ	クレモナ	径6mm	10m	船尾より下げる
(リ)	浮 子	合成樹脂	14cm		Plover AC-8浮力80g, 38個使用
(ヌ)	沈 子	鉛	37.5g	3.5cm	48個使用
(ル)	浮 標	合成樹脂			ビニコンG-3程度, 3個使用
(ケ)-1	オモリ	石	10kg		手元方に使用する。
(ケ)-2	〃	〃	2~3kg		先方に使用する。
(ワ)	水中灯				3kW

2) 漁 法

午前2時頃出港する。魚探によりキビナゴの反応があれば船首よりアンカーを投入し、船を潮に立たせ、船上灯及び水中灯を点灯しキビナゴが集まると船尾より投網し、キビナゴが網に刺さるのを待ち、揚網後漁獲物は船上で振るい落す。普通1日2~3回操業する。

キビナゴはすぐに集まることもあるが遅い時は、夜明けまで待つこともある。

3) 使用漁船および乗組員

使用漁船は5.68トン、49馬力で、乗組員は1人~2人である。魚探、発電機、1Wの無線を装備している。

4) 漁期・漁場

漁期は周年で盛漁期は6～8月である。時期により魚体に合せて刺網の目合を変える。

1～3月20～21節, 3～5月18～19節, 6～9月18節, 10～12月19.5節～21.5節。

漁場は大宝漁協共同漁業権内の大宝湾内および大宝崎周辺で水深は28～33mである。3～5月にかけて力尾崎湾内, 水深35～47mで操業する場合もある。

5) 漁獲物

キビナゴ, 価格は1箱(15kg) 1,500～9,000円と変動が激しい。

6) その他

(1) 午前0時に漁獲されたキビナゴは腹部が赤くなるほどプランクトンを食べているので, 鮮度が落ちやすく, このため出漁は午前2時以降にしている。

(2) 冬場, 北西の季節風が強まり五島一帯が時化している時でも, 大宝湾内はかげになっているので風が当たらないため操業可能であり, この時期キビナゴの価格も上る。

(3) 大宝漁協内でのキビナゴ刺網操業船は23隻で殆ど2～7トン, 20～50馬力の船である。

※この漁具・漁法は昭和58年(1983年)当時のものであり, 平成14年(2002年)現在, 漁具の浮子方長10m以内, 網高さ8m以内, 集魚灯光力計3kW以下で操業されている。

34 キビナゴ刺網〈平成13年〉

調査地 福江市福江(丸木)

沿革 福江島のキビナゴ漁はすくい網で行われていたが, 昭和48～49年(1973～1974年)頃から刺網漁業に変わっていった。当初の刺網は, 月夜間の砂浜に寄ったキビナゴを脅して獲る狩刺網として行われていた。また以前の網糸は綿糸だったが, 昭和56年(1981年)頃からナイロン網が導入された。昔は食品としてのキビナゴの鮮度を保つことが難しく, 自家消費以外はタイ釣用の餌として利用されていた。

1) 漁具

(1) 見取図および一般構成

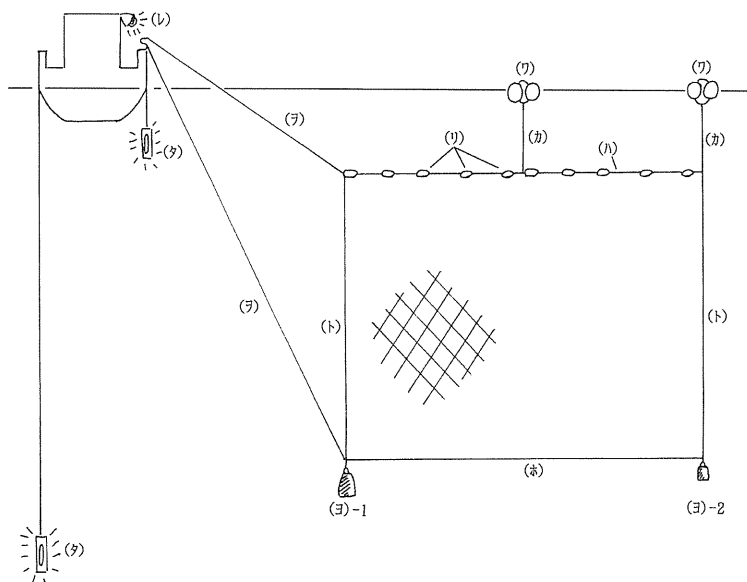


図34-1 操業見取図

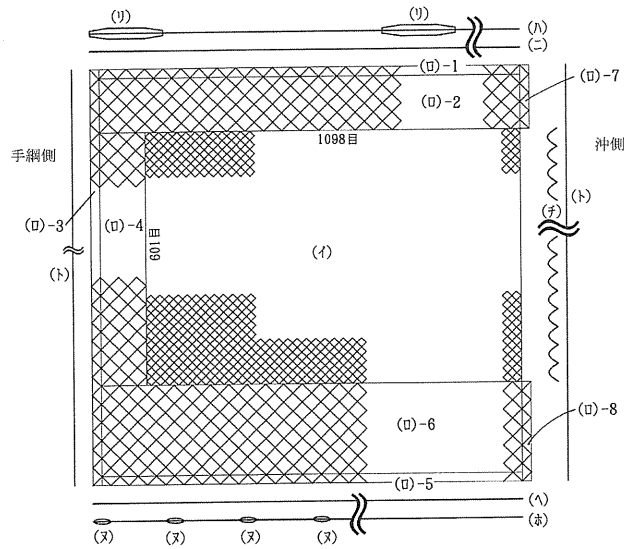


図34-2 一般構成

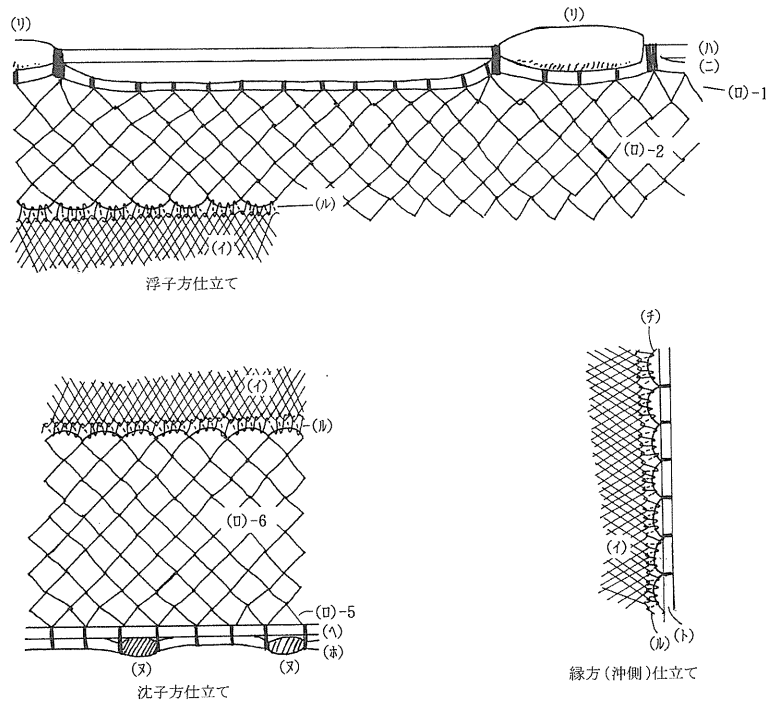


図34-3 縁仕立て

(2) 漁具仕様

表34 仕様表(1反分)

(イ) 網地および網類

符号	名称	材質	太さ	目合	掛目	長さ	仕上り長	数量	備考
(イ)	身網	ナイロン	3×3本	20節	601目	17.51m(1098目)		1	
(ロ)-1	浮子縁網1	スパンナイロン	1mm	6節	0.5目	16.79m(277目)	9.96m	1	半目手すきして浮子添網に結着
(ロ)-2	浮子縁網2	ナイロン	15本	6節	3.0目	16.79m(277目)		1	
(ロ)-3	縁網1	スパンナイロン	1mm	6節	0.5目	10.12m(167目)	8.00m	1	半目手すきして縁網に結着
(ロ)-4	縁網2	ナイロン	15本	6節	2.5目	9.57m(158目)		1	
(ロ)-5	沈子縁網1	スパンナイロン	1mm	6節	0.5目	16.79m(277目)	9.96m	1	半目手すきして沈子添網に結着

符号	名称	材質	太さ	目合	掛目	長さ	仕立上り張	数量	備考
(ロ)-6	沈子縁網2	ナイロン	15本	6節	5.0目	16.79m(277目)		1	
(ロ)-7	縁網 3	スパンナイロン	1mm	6節	0.5目	0.21m(3.5目)	0.26m	1	半目手すきして縁網に結着
(ロ)-8	縁網 4	スパンナイロン	1mm	6節	0.5目	0.33m(5.5目)	0.17m	1	
(ハ)	浮子網	クレポリ	8mm				10m	1	両端はつぼ
(ニ)	浮子添網	クレポリ	5mm				10.5m	1	浮子網の5%増し
(ホ)	沈子網	ポリ	5mm				10m	1	両端はつぼ
(ヘ)	沈子添網	クレポリ	6mm				10m	1	沈子網と同長
(ト)	縁網	クレポリ	6mm				8m	2	

(ロ) その他

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
(チ)	目通し	スパンナイロン	1mm 9.96m	1	
(リ)	浮子	合成樹脂	ブローバー Y-8	18	浮子下3目結着, 浮子間11目結着, 他1目殺し
(ヌ)	沈子	鉛	5匁	70	沈子間4目結着
(ル)	縫合糸	スパンナイロン	1mm		身網とナイロン縁網をかき合わせる
(ヲ)	手網	クレモナ	4分 40m	1	折り返して両端を網縁の上下に繋ぐ
(ワ)	浮標	合成樹脂	ビニコン G-3を2個並べてクレポリ6mmで繋いだもの	2	
(カ)	浮標網	クレポリ	6mm 1.5m	2	
(ヨ)-1	錘 1	鉛	15~16kg	1	
(ヨ)-2	錘 2	鉛	150~250匁	1	
(ク)	水中灯	キセノン灯		2	水面用と底層用
(ケ)	集魚灯	キセノン灯		1	集魚灯, 水中灯の光力は合計3kW

2) 漁法

出港は午前2時、操業は夜明けまで行う。

春～夏の操業については、まず漁場に着了いたら魚探でキビナゴの反応を探す。キビナゴの反応は海底近くにはぼんやりと見える事が多いが、その中でも反応が高いところがあればアンカーを打って船を止める。船の上で集魚灯をつけてしばらく待つと、魚探に魚群がだんだんとまとまる様子が現れるので、それから水中灯を海底から1.5m程の高さで点灯する。さらに待つとキビナゴが船を中心に廻りながら、らせん状に水面上がってくるので、これを待って船尾から投網する。船の周りを廻るキビナゴを受けるように、流した網を凹ませたほうがよく掛かる。

冬時期の操業については、月夜間にはキビナゴが砂浜の岸際に集まり、砂浜にうち上がるほど密集している場合もあるので、このような時は船を岸にぎりぎりまで近づけ、集魚灯をつけ同時に投網する。闇夜の時はキビナゴがあまり密集しないので、砂浜の岸際で集魚灯を点けてキビナゴを集めてから網を入れる。

網を入れたら、魚の掛かり具合を見ながらすばやく揚網する。網から魚を外す作業に時間がかかると鮮度が落ち腹が赤くなるため、1網に16kg入り箱20箱程度となるよう調節する。キビナゴは網から振り落とした後、魚倉の中に作った海水氷にキビナゴ5箱程を入れてかき混ぜ、半角ほどの氷と海水を魚倉に足して、さらにキビナゴ、氷、海水と順に入れこれを繰り返す。箱立ては帰港後行う。

船を固定する時にアンカーロープを船首と船尾に分けて固定すると、船が流れに対して横に向くため、揚網、投網が船首でできるため効率が良いが、瀬戸の中では潮の流れが強すぎた場合、転覆しそうになり危ない。

3) 使用漁船および乗組員

4トン、4人乗組み（船頭1名、網持ち3名）。

4) 漁期・漁場

漁期は周年。

4～10月の漁場は沖合の水深60～80mの海域で底質に左右されない。

11月～翌年3月の漁場は砂地の岸際で、舵が当たる程の水深のところでも操業する。

5) 漁獲物

キビナゴのみを漁獲する。キビナゴは1箱16kgで水揚げされ、市場では1箱8kgで取引される。価格は漁模様によって変動しやすく、1,500～9,000円/箱(16kg箱)である。漁協での取引は1統20箱以内と取り決めている。

35 キビナゴ刺網〈北松編〉

調査地 宇久町平

1) 漁具

(1) 見取図

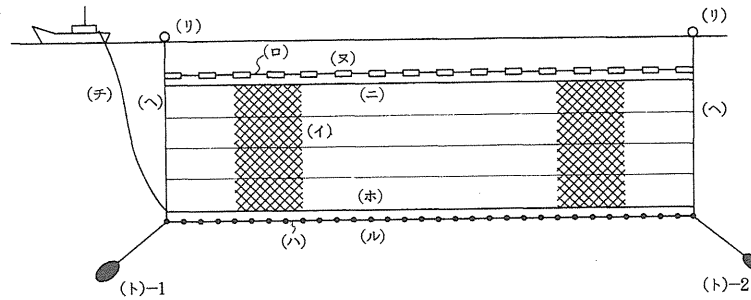


図35 一般構成

(2) 漁具仕様

表35 仕様表(1反分)

符号	名称	材質	規格・寸法	備考
(イ)	身網	テトロン	19節(17mm)100目	15m切り, 4反を横目に使用する。 (仕立上り長さ10.5m)
(ロ)	浮子網	クレモナ	9mm	キビナゴの層により調整するが, 普通水面下1mの深さにする。 (// 10.5m)
(ハ)	沈子網	//	9mm	10.5m
(ニ)	浮子添網	//	120本	10.5m
(ホ)	沈子添網	//	//	10.5m
(ヘ)	浮標網	//	9mm	水深の1.2～1.3倍
(ト-1)	オモリ	自然石	4kg	手元方に使用する
(ト-2)	//	//	2kg	先方に使用する
(チ)	もやい網	クレモナ	9mm	
(リ)	浮標			
(ヌ)	浮子	合成樹脂	MC-5 明星ゴム	1反(10.5m)に42個, 浮力17g
(ル)	沈子	鉛	19g	1反(10.5m)に200個

2) 漁法

日没後, 投網し, 水中灯(1.5～2.0kW)を網の中央部付近の水面下スレスレに入れて魚群を誘引し, 漁獲する。普通1日に2回操業するが, 月夜は漁がよくない。

3) 使用漁船および乗組員

4～5トン級船, 20～40馬力で, 2人乗組み。

4) 漁期・漁場

5～6月と11～12月。宇久島周辺一帯の砂浜～瀬が漁場となる。

5) 漁獲物

多い時は, 30～40箱(1箱7kg入)も獲れることがある。

※この漁具・漁法は昭和58年(1983年)当時のものであり, 平成14年(2002年)現在行われていない。

36 カツオ浮曲刺網〈北松編〉

調査地 平戸市度島

1) 漁具

(1) 見取図

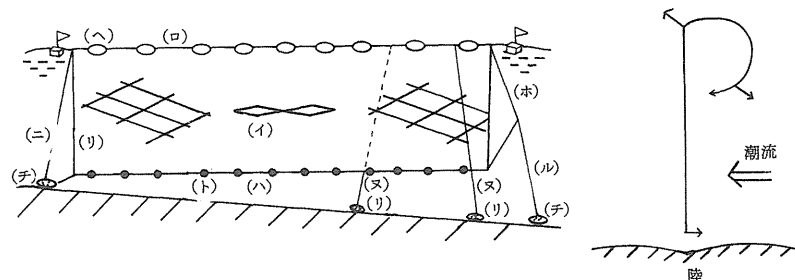


図36 一般構成

(2) 漁具仕様

表36 仕様表

符号	名称	材質	規格・寸法	数量	備考
(イ)	身網	ナイロン	6~8本, 9.6cm目	1反	100目, 150mを横目で使用
(ロ)	浮子網	ポリエチレン	7.5mm, 75m	2本	
(ハ)	沈子網	〃	〃, 76.5m	2本	
(ニ)	股網	〃	9mm	1	浮子方は水深の1.1倍, 沈子方は4.5m
(ホ)	〃	〃	18mm	1	9mの2折り
(ヘ)	浮子	合成樹脂	平浮子(15cm) 規格不明	100個	1.5mに2個取付
(ト)	沈子	鉛	37.5~112.5g	19.1kg	1.5mにつき375gになるように取付
(チ)	碇(大)	自然石	20kg	2個	
(リ)	〃(小)	〃	5kg	2個	
(ス)	碇網	ポリエチレン	9mm	2個	水深の2~3倍長
(ル)	〃	〃	〃	1個	水深と同長

2) 漁法

沖に向って直線的に船尾から6割位を投網した後、潮上側に弧を描くように打廻して網口間隔が7.5~9mになるように投網する。揚網は右舷より行い、魚を取りはずした後、再び投網するが、大体1週間位で網が汚れて漁獲が減少するので網を取り替える。

3) 使用漁船および乗組員

使用漁船は3トン未満で、乗組員は1名である。

4) 漁期・漁場

漁期は9~12月で、水深は10.5~12mである。

5) 漁獲物など

カツオ・メジナ・スズキ・シイラなどで、沖に出す程シイラがかかる。

昭和51年(1976年)頃まで行われていたが、採算が合わなくなったので昭和56年(1981年)当時休業している。

(3) 流刺網類

37 トビウオ流刺網〈沓岐・対馬編〉

調査地 上対馬町鰐浦

沿革 戦前(昭和16年(1941年)以前)より操業されており、当地に導入された年代は不明である。

1) 漁具

(1) 見取図

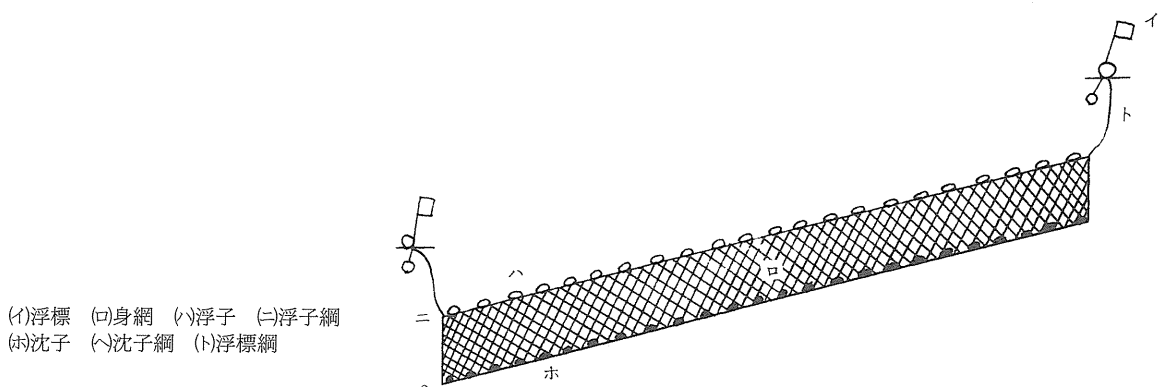


図37 操業見取図